

# 樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人  
会長 安岡 明  
facebook

文久元年真吉は尊王攘夷に目覚める？

# 文久元年真吉は「大きな賭け」にでた！

## 文久二年真吉は御目見え格に登用された！

### 土佐勤皇党結成

★文久元年真吉は高知に居た。九月に新しい役職に就く(下記参照)十月六日旧知の佐々木高行から連絡があり、江戸から武市瑞山が重大なる構想をもって帰国したと言った。翌日早速に真吉は武市瑞山に会い詳細を聞いた。その翌日から本山氏、平井収二郎にも会い意見を聞いている。決して自分の判断だけで行動に移していない。慎重であり、ち密である。武市瑞山が土佐勤皇党を結成し策動を始めた時期の劇的な場面に真吉は目撃者になった。大石弥太郎の起草による土佐勤皇党の盟約書には、尊王攘夷思想とともに、安政の大獄により失脚した前藩主・山内容堂の意志を継ぐ

ことが謳われている。自身の手で血盟書を土佐へ持ち帰った武市は最終的に二百人余の参加者を集めた。しかも血盟外同志・協力者を含めると五百名を超えたともいわれ、土佐における尊攘運動の一大勢力となった。盟主である武市こそ「白札」(上士と下士の中間身分)の出身であったものの、他の構成員は郷土層を中心とする下士が圧倒的多数を占め、ついで庄屋が多かった。一方、当時藩政を握っていた上士の参加者はわずかであった。だが真吉は決して軽率に動かない。この時期あくまで尊王攘夷であり討幕の意識は未だなかった。しかし真吉は行動にでた。土佐藩として何を為すべきか、その提言を纏めたのである。

## 文久元年十月 樋口真吉、武市半平太と出会う

9月6日 真吉は「文武方下役加役併教授方証拠役」を拝命  
これは高知に出来つつあった文武館の運営に関する役を  
拝命したのであろうか？

10月6日 文武館にて佐々木三四郎から武市半平太の江戸での重大な話の概要を聞く

10月7日 武市氏ヲ尋、猶其説ヲ承候事

10月8日 本山氏ヲ訪、上記説ヲ聞

10月14日 平井氏ヲ訪問上同段

10月15日 幡多奉行高屋順平にもこの話を聞くも虚説だという。

### 「土佐勤皇党結成」の瞬間に立ち会った真吉

**武市半平太の構想**  
武市半平太が久坂玄瑞(長州) 榊山三園(薩摩)らと密談し、薩長土がそれぞれの藩主を戴いて入京し、勅使を得て幕府に攘夷を迫る  
という言う構想

悟をして、高知の居宅を売り、その資金で六連発銃を購入し、年末に家族を連れて中村に帰ったのである。  
★真吉の吉田東洋宛ての「存寄書」が吉田東洋の怒りを持ったのであろう。日記には詳細が記されていないから憶測になるが少なくとも九月に拝命した文藝方のお役は十二月まで務めたのである。免職になったことは事実であり、高知に居場所がなくなつたので中村に家族を連れて帰つたのであろうか？ 少し飛躍し過ぎるが真吉は土佐勤皇党に組する決心をしたのではないだろうか？  
と思いたくなる。しかも土佐藩として人事異動で真吉を幡多奉行所に転勤させたとは考えにくい日記には真吉から中村へ家族を移す願いを出し、聞き届けられたとある。表面的には手順を踏んでいる。果たして真吉のこの行動を藩庁はどう解釈したのだろうか？  
真吉は反吉田東洋派であることを旗幟鮮明にする賭けにでたのだ。

★十一月二十三日真吉は「時勢存慮上書」を書いて上司・尾崎源八に提出するも自重した方が良いと止められる。そして、吉田東洋宛てに「存寄書」を書いて

提出した。  
**真吉の覚悟**  
★真吉は決して付和雷同して軽率に走らない慎重な思慮があったは

ずである。しかし、この二つの提言書のために免職になってしまう。そして次頁に掲示するがお役御免を機に真吉は重大な決意をした。さすがに真吉も一大覚

「樋口真吉日記」の中  
で渋谷先生は「真吉は  
家宅を売り払い、その  
金で六連銃を買う。真  
吉のこれから生きる途  
と覚悟を暗示するよう  
な面白い物だった。樋口

真吉四十七歳の冬のこ  
とである。」と書き、  
「真吉はもう既に頭に  
血が上る年齢を通り過  
ぎているのである。」  
とも書いて、今更真吉  
が土佐勤皇党に組する

はずはないと解釈をき  
れている。我々は既に  
真吉のその後の歩みを  
知っているの、この  
ような解釈が自然かも  
しれない。しかし吉田  
東洋に提出した「存寄

同八日、本山氏ヲ訪、右ノ説ヲ聞

同十四日、平井氏ヲ訪右同様

十五日、幡多御郡奉行高屋順平殿出府ニ付、右小南へ相談、前件之次第時勢切迫之話相及、

順平殿其説ヲ不言曰、此段半平太婦國之上時勢之説ヲ唱候得共、右様之事ハ聞無之、都而

虚説ナリト

廿五日頃高橋某他邦ヨリ歸ル、其説ニ云、長州侯御登駕、芸備之境ニおいて御帶坐ナリト

廿日、雨森氏官譚ヲ蒙ル

廿三日、半平太風憲台エ被召出、時勢ノ事被問候趣之事

十一月廿三日、時勢存慮上書ヲ認知、尾崎源八、深源八云、此書可不出、火虫ノ勢ニテ不可宜

我今要路ニ在リ、此事ヲ以長官ニ達スベシ、其後勢ヲ以足下ニ告シ、先可差相ト

十二月六日、東海道大磯ノ宿ニ薩州飛脚川上式部之上書ヲ盗ツ為ニ被奪ト云フ事ヲ聞、但此

頃商人三島屋ノ僕九州ヨリ歸ル、其途中之話ニ諸國米穀津留ニ相成、且又右御國許ニおいてハ

測量ノ為ニ来ル英夷馳走として牛鶏ヲ相設ノヨシ、世上嘲笑アリト云

十一日、爾来ノ文武方下役御免被仰付之

十八日、安岡東三郎、肥後ヨリ歸リ云、薩國境工新城ヲ築キ、建札ニ云、關入ノ者ハ可打捨也ト

廿日、參政吉田氏へ存寄書差出ス、大意、方今出多も神州夷狄之汚ヲ受候事如何にも不安次第

請速ニ旧染御一洗、実用被相行度頃目、勤王ノ者も有之様相聞、實に來ニ一機會御家名

御光輝此時と奉存趣也、家宅ヲ売却、六連銃ヲ除ル

廿七日、家芸用を以、当分旧甲中村へ家族召連罷越度旨願、御間届之上、浦戸ヨリ乗船  
廿九日、中村着

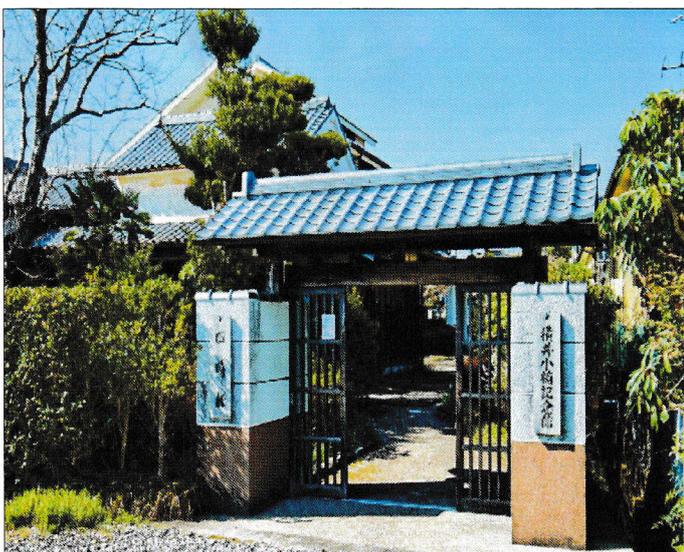
書」で真吉は土佐藩の  
差し当たつて為すべき  
ことを列挙した中で、  
吉田東洋が幕府に對す  
るアピールのために良  
材を伐採して品川藩邸  
の修築をすすめたこと  
を批判している。吉田  
東洋の藩政に對し臆す  
ることなく堂々と批判  
し、その「存寄書」を  
吉田東洋に提出したの  
だから真吉の覚悟は既  
に出来ていたというべ  
きであろう。彼の堂々  
たるこの態度は未だ血  
氣盛んである。

### まさかの出来事

人生には「上り坂」  
と「下り坂」の他に  
「まさか」がある。  
文久二年にその「まさ  
か」が起きた。四月八  
日執政吉田東洋が暗殺  
されたのである。人生  
はいつ何が起きるか分  
からないが、その暗殺  
の数日前に坂本龍馬が  
脱藩している。土佐藩  
は直ちに吉田東洋の強  
引な改革に批判的な保  
守派が政権を担い、真  
吉を再評価した。まさ  
か真吉はこの件を予見  
していたのだろうか？

### 運命の文久二年六月二十一日

★此の日真吉は高知城  
二の丸において「御供  
達御歩行」を命じられ、  
翌日には玄關前に於い  
て藩主山内豊範に初め  
て御目見えが許された。  
実は「樋口真吉伝」に  
「同年五月八日、中村  
御蔵役御代官下役並び  
に御山方銀米作配役ヲ  
命じられたるも病を以  
て出でず」という記述  
があるという。渋谷先  
生は「真吉にとつて中  
村の小役人に安住して  
いる時ではない。真吉  
は志願して山内豊範隨  
従の上洛を藩庁に願  
い出たのであろう。」と  
書いているが、果たし  
て真実は如何であつた  
ろうか？五月八日は既  
に吉田東洋は居ないか  
らあるいわ真吉も志願  
したのかも知れない。  
★藩主山内豊範は五月  
二十八日、土佐を発籠  
し、真吉も随従した。  
これは豊範が参勤交代  
の年に当たつていたこ  
とと、武市一派の京都  
での画策によつて朝廷  
から上洛の催促があつ  
たからだと思われる。



★そしてここでもう一  
つのまさかが起きた。  
大坂では麻彦(はしか)  
が流行して一行は  
足止めを余儀なくされ  
た。そのお陰で真吉は  
大坂の街中で坂本龍馬  
に出会った。七月二十  
三日の日記に龍馬に一  
円提供したとある。  
当時武士の嗜みとして  
羽織の襟元には纏まっ  
た金子を縫い付けて置  
くことが常識とされて  
いたから、真吉はその  
金子を融通したのであ  
らう。

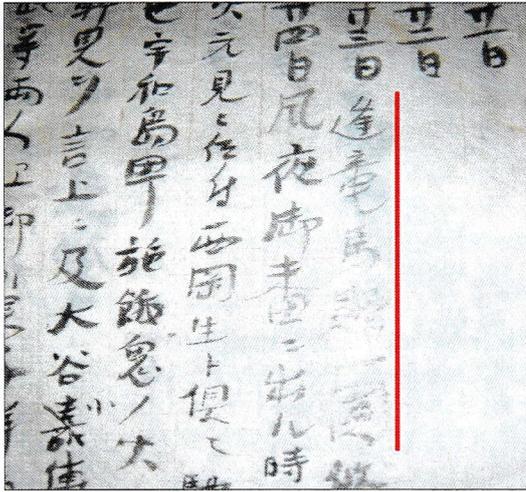
ろうか。龍馬は三月に  
脱藩し伊予から九州に  
向かい薩摩を目指すも  
入国できず江戸を目指  
していたのだという。  
これを否定する説もあ  
るが筆者は四年前に熊  
本市の横井小楠記念館  
「四時軒」を見学した  
際、学芸員から坂本龍  
馬が薩摩への往復で二  
度四時軒に泊まり、横  
井小楠と会話が弾んだ  
との話を聞いている。  
龍馬は長旅で路銀が不  
足していたなら真吉か  
らの一円(今の四万円  
位)は龍馬の助けになつ  
たであろうと思われる。

# 京都では瑞山と真吉は蜜月

★土佐藩主山内豊範は江戸に向かう途中で八月二十五日に入京した。京都で山内豊範は京都警衛と国事周旋の勅命を受け、薩長両藩に協力することになる。朝廷との折衝には、画策した武市一派の土佐勤皇党の同志たちがこの発龍に随従していたので真吉と武市瑞山は京都滞在中は連日出会う機会を捉えていた。

★山内容堂公はどんな人物であつたらうか？ 渋谷先生は容堂公をこのように表現している。「山内容堂は勤皇家であると同時に徳川家に対する恩義からくる佐幕意識を強烈に持つと言う複雑な・と云うよりは、ある意味でまことに分かりやすい純粋な人物であつた。」その根拠に容堂公が側近に語つたという文言「万一にも世の中が紛糾した時は朝敵の名は絶対に受けない覚悟な

## 龍馬に一円贈と記載した日記



は公武の和をなるべく周旋するも千万にも行き詰る時は大義に従う(一皆山集)を例に挙げ「この容堂公の姿勢は最後までブレていないが、要所所での決断は恐ろしく遅く、決断した後には飲酒して喚き散らしても後の祭りとなることが多かつた」と評している。容堂公は諸侯の中では傑出した政治能力を持つ人物であつたことは確かであり、良かれあしかれ、彼の言動の中身を論ずるに足る数少ない殿様の一人であつたことは疑いない。」と評している。

たもので、熊本藩士の堤松左衛門の要請を受けて武市が発案して具体化したらしい。しかし三条美美から肥後藩主あての親書を携えて訪問するも不首尾に終わった。此の探索の旅の報告を真吉は江戸まで下つて藩主豊範に復命している。この時真吉は初めて容堂公にお目見えした。これ以後真吉は容堂公の側近として随行することが多くなつた。

### 藩主に講義

八月七日とあるので大坂藩邸のことか、真吉は三十歳も若い藩主豊範を諭すように勤皇とは何であるかを講義をしたという。「天下の時勢」と題する講義録が「樋口真吉伝」に残されている。これも中村に文武館を創り自ら講義するため、藩主に講義する際に役立つた訳で、真吉としては大変な名譽に感じたのではないだろうか。もちろん旅先の事であつた事情もある。

### 真吉は土佐勤皇党に入党？

★文久元年は武市らが土佐勤皇党を結成し、200余名の同志を結集したことは最初にふれた。そして京都に居る間には真吉と武市は親密に交流している。従つてこの土佐勤皇党の血盟連判に真吉が署名しなかつた理由は明らかでない。外部から見れば真吉も勤皇家なのであつたらうか。外部から見れば真吉も勤皇家なのであつたらうか。外部から見れば真吉も勤皇家なのであつたらうか。

### 伊豆の下田港で!

★真吉は江戸で西国探索の復命を行った後に十一月二十九日真吉は「江戸方御徒歩目付加役」を拝命した。年が明けて容堂公には上洛の要請が朝廷よりあり、容堂公の側近として海路大阪へ向かつた。容堂公の場合は参勤交代ではないが、江戸から大阪までの船便を福岡藩の蒸気船・大鵬丸を借りて大坂に向かつた。途中天候の影響で伊豆の下田港に一時避難した時、偶然勝海舟の乗った幕府の軍船も下田港に立ち寄つたという。そこで勝海舟と容堂公の思ひ合せがセツトされ、海舟から脱藩の身の坂本龍馬を許すよう容堂公に話がなされたと言ふ。真吉は残念ながら身分の関係で宿舎が容堂公とは異なつていて、この会談には立ち会つていない。従つて真吉の日記には何の記載もない。(続く)

### 従七位から従四位へ

★樋口真吉の墓碑には「贈従四位樋口真吉」と明記されているが、明治2年真吉は生前に**従七位**を授与され明治天皇にも拝謁したと記録されている。それが明治三十六年になり明治の世が落ち着いてきたのか、戊辰戦争時の叙勲の見直しがなされて、**樋口真吉は従七位から従四位に大きく評価が挙げられた**。この**従七位から従四位に再評価されたのは、真吉の戊辰戦争での当初の評価が低すぎたので、**

これを改めるといふことを意味している。同じ**従四位**には、日露戦争で大活躍した愛媛の軍人**秋山真之**も叙せられている。  
★この戊辰戦争時の評価について渋谷先生は**板垣退助**という人物は自由民権運動のイメージとは裏腹の人物で、**真吉**を足軽の出であるという身分で評価したと断言されていた。土佐藩には上士と下士の厳しい身分制があった。上士の中にも**佐々木高行**のように身分にとられない評価をする人物も居るにはいたが、上士の**板垣退助**は

位階	位記のサイズ	位階	位記のサイズ
正一位 (しょういちい)	225×304mm	従一位 (じゆいちい)	225×304mm
正二位 (しょうにい)	225×304mm	従二位 (じゆにい)	225×304mm
正三位 (しょうさんみ)	225×304mm	従三位 (じゆさんみ)	225×304mm
正四位 (しょうしい)	225×304mm	従四位 (じゆしい)	225×304mm
正五位 (しょうごい)	213×297mm	従五位 (じゆごい)	213×297mm
正六位 (しょうろくい)	213×297mm	従六位 (じゆろくい)	213×297mm
正七位 (しょうしちい)	213×297mm	従七位 (じゆしちい)	213×297mm
正八位 (しょうはちい)	213×297mm	従八位 (じゆはちい)	213×297mm

※位階により「位記」のサイズが異なります。額をご用命の際は授与された位階をご確認ください。

★前号で大石神陰流のご紹介をしました。その中で長刀を持っている写真説明を長刀を使うことが大石神陰流であるような説明を書きました。これは間違いで、この流派の基本は身の丈に合う刀を使うことだそうです。お詫びして訂正いたします。

### お詫びと訂正

出自にこだわる典型的な人物だったと言う。  
★戊辰戦争終結後、**板垣退助**本人は従一位に叙せられ、千石賜り、高い評価を受けた。部下の評価は当然ながら**板垣退助**が行う。**真吉**は足軽から出世して、既に身分は下士になっていたが、上士ではないという評価を**板垣退助**がした結果が従七位であったのであろう。明治三十六年、幸いにも未だ戊辰戦争時の**樋口真吉**の功績を高く評価してくれていた有力な政府高官が政府内におられたのであろう、**真吉**の評価の見直しが実現したのであった。



★渋谷雅之先生を囲む会を六月十三日の前夜に開催しました。渋谷先生には短時間ではありますが、破八幡宮の亀谷宮司のご協力で社殿にて執り行うことができました。(右写真)

### 編集後記

★幸い当日は良い天候に恵まれましたが、予報では雨天の心配があり、破八幡宮の亀谷宮司のご協力で社殿にて執り行うことができました。感謝申し上げます。

★樋口真吉墓前祭 六月十四日樋口真吉没百五十年祭を関係者の皆様のご協力により破八幡宮の社殿にて無事開催することができました。当日は徳島市

から遠路はるばると渋谷雅之先生もお出で頂き、四万十市平市長、小出市議会議長、徳弘教育長にも参列頂いて有意義な百五十年祭を開催できました。

